


序

近年の医療機器の進歩により、心電図の判読もコンピュータ内蔵の心電計による自動診断で行われるようになってきた。健診や多くの患者さんを相手にするときに頼りがちであるが、表示された診断には心電図検査を受けた人の息づかいが聞こえてこない。「心電図は心臓の顔」と編者は思っている。機嫌のよいとき、悪いときに人はさまざまな表情をする。面と向かっていると、その表情を読むことをわれわれは日頃行っており、人間関係、社会をつくっている。心臓も同様に、十人十色さまざまな波形を示し、調子のよいとき、悪いときと時々刻々と変化している。その心臓の表情をとらえる基本的な検査が標準12誘導心電図である。わずかに数秒間の記録であるが、そのとき心臓はどのような状態であるかを1枚の心電図から推測することは、好奇心のある者にとっては楽しいことであり、興味深い。

本書は難しい理論は排除して、生の心電図に親しむことを目的として企画した。解説の形式をとってはいるが、実際に心電図をどのように読んでいるかを初心者の方たちに理解してもらうことを目的としている。1つの心電図をじっくりと見てもらい、その心電図と鑑別が必要な心電図や類似している心電図を並べて表示した。また、関連する項目に関しては、の表示を文中に挿入してある。

執筆は若手からベテランの循環器内科の医師が分担で行った。それぞれの執筆者の個性も出ており、おのおのの視点で読み方もさまざまである。実際の現場での仕事はこのようなものであり、心電図の判読を形にはまってしまうこともないと思う。数秒間の短時間の波形のなかに秘められている謎を少しずつ解き明かしていけば、初心者にも多い心電図アレルギーも減ってくると考えている。

本書によって、研修医や医学生に限らず、看護師・看護学生、理学療法士、臨床検査技師など医療に携わる初心者の方々が、少しでも心電図に興味を抱いてもらえれば編集者としてこのうえない喜びである。

最後に本書の上梓にあたり、編集者の無理難題に承えてくれ、孤軍奮闘で上梓にこぎ着けてくれた有限会社ナップの亀田由紀子氏に深謝いたします。

2009年8月

聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院
循環器内科 教授 武者 春樹